

門連龍と號し、神保氏春の妹婿と成る。此の使を道仙寺勤めけるに、氏春より引出物に臨差を出す。其の臨差長の家士中田善兵衛家藏す。といへり。伊久留村は鳳至郡山田郷内の屬邑にて、了意の本居也。鹿嶋郡三階良川保内にも、同名の村落あり。

○加藤將監家傳

家譜に云ふ。加藤將監慶下。大永年中榊木左衛門逆心之由、馬淵刑部口上。依畠山殿慶下種々御頼、榊木之城被責時、慶下從後向責入、左衛門弟榊木六郎生捕之。享祿四年宗滿加州爲一揆退治出馬、慶下及畠山・大隅・遊佐・溫井・三宅・隅屋等加州出陣。此時□□當病出陣無之、慶下御手之人數被預。十一月二日於津幡一戰、能登勢敗軍、大隅始畠山家人數百人、御家人宇留地彦右衛門等數十輩討死。慶下數回戰、於津幡橋爪戰死。其子將監。天文□年能州羽咋郡大畠合戰之時致力戰、三月二日討死。妻上野彈正姊也。彈正事御家子上野之屬家也。天文十二年十一月廿五日石塚合戰之時、首數討取、其外度々手柄有之云々。其子將監、若名紀三郎。天文十九年五月十二日遊佐美作守敏光、加州小原松根城主洲崎

兵庫・能州末森城主土肥但馬、及招一揆五千餘人率之、爲攻七尾。從七尾以畠山將監防戰、不利引退。遊佐乘勝返軍鹿嶋郡、到大槻大崩陣取。依之對馬守末廣野出陣。同五月六日合戰之時、將監十八歳、着白糸鎧、騎黑駿馬、先登於卯坂清水之邊。遊佐足輕大將小野但馬與將監爭戰、從馬上組落、取但馬之首。一説云。將監物見出處、出合敵。足輕頭小野但馬、從馬上組落、取但馬之首。永祿三年石動山内合戰之時鎧合、三ヶ處被疵。同四年畠山義則公對馬守御成之時、御家子宇留地孫右衛門・阿岸新四郎・山田十郎兵衛・關左近・中村小二郎・加藤將監・田屋□□并關與三。此八人御目見兩家子以座論目見無之。同十一年重連亭畠山義隆公御成、元龜三年畠山式部大輔殿御成、如前々御盃被下。同年重連御退陣之時、於新庄野相戰被疵。天正六年十月下旬、如庵從七尾法幢寺、經過石動山越中水見御退去之時、敵兵追來可被相拂、將監・關惣左衛門・田邊七郎左衛門・村井左京・長登岐・浦野孫右衛門・宮川清右衛門等、從山中御跡引退。同八年閏三月十四日如庵與尾山之佐久間、光琳寺所籠之木越城拔屠之時、將監・上野甚七郎・浦野孫右衛門、

小原十郎右衛門等先登。從城中觀行坊与名乘突出處、馳合鎧合。且又如庵城内深入被成、成家士隔絶殊危處、將監、浦野左右不離働。文祿二年閏九月廿六日從如庵百俵之所賜之判物家傳。且又春木五百石之代官被命。慶長十五年正月十七日死去、七十八歳。妻櫻井甚右衛門娘也。甚右衛門者御譜代中郎家也。將監弟二人有之。一人合田民部爲養子、則民部云。天正六年八月於穴水合戰之時負深手、後日相果。一人鈴木因幡爲養子、新三郎云。天正六年如庵穴水城責取籠城之時、從七尾・長澤筑前爲大將、同七四郎・杜川兵部等數千人數攻之。此節新三郎養父因幡相議御用勤之。同七年能州有之越後勢等、溫井・三宅以奸謀不和出來、甲山城主平子和泉・七寸五分田肥後友納戰死。鈴木・七寸五分田依爲門葉、新三郎屬肥後。五月廿日二十三歳、與肥後一所、於松山之下澁江村戰死云々。とあり。右加藤氏は譜代郎等の家柄にて、長家彙祖以來の家士なりけり。武道致知誓私小鏡に、長九郎左衛門の内關・中村・田屋・加藤と申四段之次第、皆家老の家柄なるよし記載す。寛文十一年十月長家舊領地召上らるゝに付、家士へ申渡す心得書に、故九郎左

衛門家來之内加藤采女・高柳馬左衛門・小林平左衛門・長伊左衛門、此四人與力被仰付。とありて、連龍の曾孫大隅守尙連幼少にて相續あり。故に家老四人をば與力士に命ぜられたるものなり。依つて御番御用等被指除、九郎左衛門用事相達するやうにとの事にて、家來同様に召仕はれ、明治廢藩の際まで長家に從ひける也。

○小林平左衛門傳話

信連記に云ふ。小林平左衛門とて、長谷部家にて武功の侍在りしが、黒瀧の長之を招き召置きたり。家老共黒瀧長與市を諫め、あの平左衛門は謀叛する事有るべし。毒蛇を懐中するにひとしきと申しけり。與市は元來知恵うすく、勇力たくましき人なれば、家老共の異見にも應ぜず、平左衛門を抱え置きけり。爰に平左衛門つくく思ひけるは、對馬守殿滅亡せられし時、とにもかくにも果てなんと、死を一篇に究めたれども、上方に連龍の居られしかば、何とぞして命をつなぎ、今一度御用にも立つべしと、忍びて身をかしくしぬる處、黒瀧殿是非共と招かれて、故主の爲命をたばふにしくはなしと、いなにも及ばず扶助せられありしか